

---

# あの夏に。

のあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの夏に。

### 【Nコード】

N9189U

### 【作者名】

のあ

### 【あらすじ】

自殺に失敗した青年村崎祐は、義母の計らいで義理の従姉弟の所へ行くことになる。愛されていない事を認めたくない彼は、家を離れたい一心でそこへと向かう。とうの昔に両親を無くし自らも死の近い弟ルカと、これから独りぼっちになるであろう姉ルイの双子の所へ。

いつしか三人は家族のようにかけがえのないものになる。しかしその時は確かに近づいていた。

祐はそこで考えさせられる。愛とはなんなのか。命とはなんなんな

の  
か  
・  
・  
・  
。

？

・・・暑い。

僕はシャツの第三ボタンを空けた。

いつもなら第二で止めている所だけれど、今日はとにかく特別暑い。それは今日が今年に入って初めての猛暑日だということもあるし、なれないアスファルトの照り返しの所為でもあるかもしれない。

東京の田舎のほうから、電車をいくつも乗り継いで僕がなぜ都会のほうまで出て来たか、それは手に握ったメモの端切れに書かれた住所に用があるからだ。

x x 町5 x 1 4 総合病院

汗でシミを地面に残しながら、ふらふらその場所を探して知らない町を歩いているのが今の現状。

・・・まいったなあ。

こんなに鉄筋コンクリートばかりじゃ日よけにもならない。

駅の自動販売機で買ったアイスコーヒーはもう沸騰しかかっている。

・・・本当に暑い。

並木の日陰に釣られて道を少し外れてみた。

少し傾斜がかかっているが、まあ日陰には代えられない。

そんな軽い気持ちで選んだ道だが、運命の神様もしくは女神様は本当にいるのかもしれない。

緩やかな上り坂も終わりを告げようとした所に、静かにその病院は建ち上がっていた。

「・・・見つけた。」

唇から言葉がこぼれた。

病院に入ったとたん、ひんやりとした空気に包まれた。

冷房が効いている。

なぜだかほっとしたが、まだ用事はここからだ。

朝早く家を出たのにもかかわらず、時計はもうすでに十時をまわっていた。

もう義母から連絡は回っているだろう。

僕は受付に立つと

「伊嶋ルカ君の病室を教えてくださいだきたいのですが。」  
と聞いた。

？

受付のお姉さんは、僕の長袖のワイシャツを訝しそうに一瞬だけチラリと見ると

「伊嶋さんの病室は5階の4号室です。」

とすぐに答えてくれた。

そこで、無意識に左手首を押さえている自分に気が付く。少し間が開いてから

「・・・どうもありがとうございます。」

とだけ言って僕はその場を立ち去った。

・・・やはりこんな真夏日に長袖は不自然だったのだろうか。

いや、手首のボタンまできっちり留めている所為かもしれない。外そう。

そう思つて右手首のボタンに手をかけるが上手くできない。

・・・もしかして、震えてる？

廊下の隅に立つてしばらくそうしていたが、一向に上手くいかないのであきらめた。

さっきまで暑い暑いと連発していたのにもかかわらず少しだけ、背筋がひんやりした気がした。

4号室の前に立ったが、すぐに扉を開くことが出来なかった。

一度ゆっくり深呼吸した。

初対面の、しかも血の繋がらないカタチだけの義従弟。

躊躇してしまうのも不自然ではないだろう？

・・・自分に言い訳したつてしょうがない。

意を決すると扉をたたいた。

「・・・どうぞ。」

返ってきたのは静かだが、鈴を転がしたような可愛らしい声。

一瞬躊躇ったがすぐに納得した。

どうやら彼の双子のお姉さんも一緒らしい。

「失礼します。」

自分より幾分年下の子供に改まるのも変な感じがしたが、彼らは義母さんの姉さんの子供で、義母さんの甥姪で、・・・僕は父さんの連れ子で・・・捨て子だから。

そつと扉を横にスライドさせる。

扉の向こうにいる双子は、早くに両親を亡くし誰も引き取りたがらずに行く当てを無くしていた子達だ。

義母さんが毎月いくらか振り込んでいたようで、どういう理屈か知らないがたった二人でここまで生きてきた。

・・・いや、一人と言つてもいいかも知れない。

伊嶋ル力は幼いころからずっと病院暮らしだった。

心臓が悪いのだ。

拡張型心筋症。

・・・それだけじゃない。

心房中隔欠損が発祥した。

不治の病が二つ同時に発祥したのだ。

もういつ灯火が消えたっておかしくないのだという。

義母さんは言った。

『命の重みを考えてきなさい。』

と。

僕の使命。

せめて、病院から離れられない双子に、最後に有意義な夏休みを。

二人に。一人きりになる前に。

？

扉の向こうには少女が二人いた。光に透ける鉛色を帯びた髪と瞳。

同じく透けるように白い肌。

おそらく色素が薄いのだろう。

その姿はどちらが病人か分からないほど……ん？少女が二人？

僕はもう一度二人をまじまじと見た。

片方は半袖ワイシャツと制服のスカートというラフな格好でベッドに腰を下ろして足を遊ばせている。

もう一人は入院着姿で身体をベッドから半分起こして座っている。格好からして後方が少年。

伊嶋ルカである。

そしてとなりの少女が彼の双子の姉伊嶋ルイ。

それにしても身長がほぼ同じくらいだし、何より小さい。

いや、僕が190近いって事もあるけど……。

たぶん少年だと説明されないと少女と間違えてしまうだろう。

ルイのショートヘアと同じくらいの髪の長さと言っこともそれを余計に引き立てている。

「はじめまして。村崎祐って言います。義母さ……叔母さんから話は聞いているよね？これから二人の世話を任されたものです。」

にっこりと微笑んでそう言う。

掴みが肝心、肝心つと。

「はじめまして。」

にっこりともせずルイが言った。

鈴を転がしたような可愛らしい声。

やはりさっきの声の主はルイで正解らしい。

一拍置いて

「すみません。お世話になります。」



とルカが言った。

思ったよりも低めだが、思わなければ高い声。

優しい顔を見ると静かに遠くを見るような目つきになった。

その姿から、目を放したらそのまま光に溶け込んで消えていった。しまいそうな静かな恐怖を感じた。

・・・ルイは隣にいて怖くは無いのだろうか？

消えてしまいそうな大切な人の隣に普通に座っていられるものなのだろうか？

僕なら絶対に、病室にすら入れないのに・・・

「ワイシャツ。」

突然ルイが言った。え？

「どうして長袖なんですか？こんなに暑いのに・・・」  
直球だった。

射るような真直ぐな視線。

無意識に左手首を押さえてしまう自分が嫌になる。

「・・・そりゃあ、冷房で冷えるし。」

とっさにしては上出来・・・のつもりだったが、

「外、こんなに暑いのに？」

「・・・そんな事どうだつていいだろ？」

相変わらずの真直ぐな視線。

・・・意地を張るのはよそう。

強がるのもよそう。

もう僕は胸を張って生きていると言える人間では無いのだから。

「・・・ごめん。うそ」

そう言うと僕は袖のボタンを外し始めた。

まずは右手首から時間をかけてゆっくりと。

それから一瞬躊躇ってから、意を決して左手首のボタンに手をかけた。

・・・現れたのは深い深い傷。

その傷を双子へと差し出した。

自虐的な笑いがこみ上げてきた。

「リストカットってしてってる？手首に剃刀で傷をつけるんだ。でもこれはそんなんじゃない……。ナイフで突き刺したんだ。睡眠薬を飲んで。風呂に水を張ってさ。……。でも駄目だった。」

駄目だった。心の中でもう一度呟く。

いつのまにか、ただ虚しさだけが残っていた。

ルイは相変わらずの冷めた表情。

ル力は悲しいものを見るような顔をしていた。

そんな顔するなよ、ル力。僕が消えてしまっても悲しむ人はいないけど、君が消えたら涙も出ないほど悲しむ人がいるのだから。

？

「……ちよつと。」

ルイはそう呟くと突然僕の左手首をがしりと掴んだ。

そしてそのままその手を引っ張って病室の外へと僕をひっぱり出した。

「えっ？ちよつまつ！」

突然の事で無抵抗のまま、僕はひっぱり出されてしまった。

……というかよくこの傷を鷲掴みにできるなあ。

しかもちよつと痛い。

身長差で腰を屈めた状態なのも厳しい。

ルイは廊下の隅まで来るとぱつと手を離して、僕のほうに振り返った。

僕が口を開く前にルイが話し出す。

「第一に、私はルカを病院から出すつもりが無い。もしもの事があった時に心配だから。」

「そのために僕が来たんじゃないか。」

「次に！命を粗末にしたやつなんか、ルカを任せられない。」

「……」

無言。

しばらく僕はうつむいていたが、ゆっくり顔をあげた。

「……お医者様から聞いているよね？ルカの病気は心臓移植するしか治す方法が無い。……でも日本では15歳以下の子供がドナーになることは難しい。……ルカはもう長く無い。ルカのことを思うなら楽しい思いをさせてあげた方がいいだろう？」

「黙れ！」

ルイが感情的になって怒鳴った。

すぐに我に返るルイ。

「……そのためにここにいるの。あと二年。あと二年もたせられ

ればルカは助かるの……。お願い。お引取り願います。」

涙を必死にこらえるルイ。

ルイの気持ちが痛いくらいに伝わってくる。

でも……。駄目なんだ。

「……これから僕は君にとって酷い事を言う。でもとても大切な事だ。」

僕を見上げるルイ。

「いいかい、よく聞いて。ルカは……。ルカは、もうもって・半年だ。」

大きく見開かれる餞色のかかった瞳。

ルイは、はっと息を飲み込んだ。

その瞳から、涙の一粒すら流れ落ちることは無かった。

そしてそのまま崩れ落ちる。

「……なにそれ……。なにそれ！何で私が知らなくてあんたが知ってるの！？なんで……。そんな大切なこと……。」

最後のほうは言葉になっていなかった。

うつむいて肩を震わせている。

気が付くとしゃがんでそつと抱きしめていた。

「……君達の保護者は、僕の義母さんということになってる。君はまだ幼くて。だから……。だから。」

そこで初めて、ルイは涙を流した。

声も上げずに、肩を震わせて泣いていた。

小さな小さな、一人ぼっちのルイが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9189u/>

---

あの夏に。

2011年10月8日23時11分発行